

ユートピア

待つ心

村田修子

五、六月は毎年何となく忙しいので
気持も落ち着かない。その時期にユ
ートピアの欄の原稿を依頼されたが、無
理をいって何号か先にのばしてもらっ
た。

こういう事情のときに書く題目が
「待つ心」というので何となくいいわ
けがましく、くすぐったいような感じ
がするが、この「待つ心」ということ
について考え、なるほど、と思ったの

はもう五年ぐらい前のことで、それか
ら何かことがあるときにときどきこの
ことばを思い出していた。それは冬休
みを利用して子どもたちとスキーに出
掛けたときのことである。

スキーの技術も年ごとに新しくなり、
同じようにすべるにしても、私が学生
のとき習ったのとは違って、曲が
るときなど体重のかけかたが、全く逆
なのである。この、なれというのは恐
ろしいもので、心掛けていてもいざす
べる瞬間になると体重は自然に元の側
に移ってしまう。そこで最初から教え
てもらふ必要があると思って、かつて
オリンピック回転競技で二位になった
猪谷千春氏のお父さんの、猪谷六合雄
氏の主催するパラレルスキー学校に参
加したのである。決して若くない私も、
番号のついたゼッケンを前後につけて
初歩のグループにはいり、ほんのゆる

やかな傾斜をすべりおける練習を始め
た。ある点で曲がろうと思つて両足を
そろえたまま体重の移動をするが、な
かなか曲がついていかない。

猪谷先生は当時七十六歳であられた
と思う。七十歳ぐらいのとき自動車の
免許をとられ、それを大いに駆使して
山から山へ出かけられ、そのワゴンを
自分で改造し、ほとんどその中で生活
なさり、訪れる人にならぬ中でわかつた
コーヒーを入れ、話し相手になつてく
ださる。私も一晝ほどのたたみの上で
ごちそうにあずかったが、その車が完
備されたホテルの前の雪の中にポツン
と止まっている風景は、本当に対比的
であった。

昼間、先生はいくつにも分かれたグ
ループ一つ一つを回り適当にアドバイ
スされる。そのほかにひとりずつ写真
をとつて夜のミーティングのときに見

せてくださる。それによって欠点、直しかた、よい点等、前後の動きをちゃんと覚えていらっしやって、こままと加えながら全員に話をされる。その話の中に「待つ心」ということばがあった。

体重のかけかたによって次第に右や左の方に曲がってくる話のとき、体重をかけ、重心の移動をしたのなら、自分の意志で曲げようとしなくても、その先は待つていれば自然に曲がってくるので、その時機がくる前に無理に曲がろうとすれば姿勢はくずれ、動きがスムーズにいかなくなる。いつ曲がるかはわからないけれど、というよりはもうほんの少し待てば、というときに待たない……。この「待つ心」というものをもう一度考えてください」とおっしゃられた。

これに私は其感を覚えた。それは幼児のことに非常に関係があることばだったからである。

すべるのにスキーという道具があつてなかなか思うようにいかないのと同様に、幼児のことも性急に何かしようと思つても自分だけではなく、生きた、意志をもつた子どもがいるから、「待つ心」という余裕ある気持をもたなければならぬと思う。

しかしそれにも、スキーの場合どちらかに体重をかけたように、やはりそこに一つの加えるものがあつてこそ待つていてよいのであつて、何もせずにただ待つ、というのではない。そして何かを加える、その質、程度、時機、方法などがそれにちょうど適しているものであることが必要なので、それを見いだして与えた結果、待つということとは、幼児ひとりひとりが千差万別で

あるだけに変なむずかしいことだと思ふ。

今の世の中の動きを見ていると、「待つ心」とは全然逆に、何か加えることばかりを考えているような気がする。

与えたそのものが子どもの中で十分にそしゃくされ、子どものものであることを待ちもしないで、次から次へと重ねて与える。そしてこうやらないとあたかも時代おくれであるように錯覚しているこの時代に、私は逆に「待つ心」の大切さを強くいたい気持になる。

雪がとけ、次に燃えるような青葉になり、それが紅葉してまた白い雪を迎える、という年中待つて心で動いている自然の中で聞いたこのことばは、本当に感銘深くいつまでも心の中に残っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)